

## 環境文明社会づくり あれこれ(29)

### 源流(29)

いうまでもなく環境庁は環境を保全する重大な使命と責任がある。しかし、企画調整官庁なので、交通公害に関しては交通に関する様々な権限を有する警察庁、運輸省、建設省、通産省などの実施官庁に対し、何を要請すべきかを室内でしっかり検討し、80年6月、中央公害審議会に諮問し、各界有識者や専門家に広く検討してもらうことにした。

諮問文には、これまでも環境基準の設定、発生源対策、周辺対策等を実施してきたが、いまだ十分な成果をみるに至っていないため、交通公害問題に多面的に取り組み、総合的な施策を樹立することが急務であるとの認識を述べた上で、「今後の交通公害対策のあり方を明らかにする必要がある」ので、審議会の意見を求めて、土屋義彦長官名で諮問した。これを受け、中央環境審議会は、この問題を審議するため交通公害部会を設け、そこに「物流」と「土地利用」の両専門委員会を立ち上げて検討を開始した。私ほかスタッフは、公害現場への対応とともに、二つの専門委員会での検討に資する資料

作りに追われた。そんな中でも、作業終了後の夜には、スタッフ一同で新橋の小さな(安い)スナックに出かけ、当時はやり始めたカラオケで仕事の緊張を洗い流したこともよくあった。好んで歌った中の一つに、八代亜紀さんの「舟唄」があったが、40年以上経った今でも、この歌をTVなどで聴くと、当時の仲間の顔が目に浮かぶ。

もう一つ。その頃のある日曜日、私は家で寝転んで島崎藤村の大作『夜明け前』を読んでいて次の一節にぶつかった時には、思わず起き上がり、目を凝らして読み直した。そこには「交通の持ち来す変革は水のように、あらゆる変革の中の最も弱く柔らかなもので、しかも最も根深く強いものと感ぜられることだ。その力は貴賤貧富を貫く。人間社会の盛衰を左右する。歴史を織り、地図をも変える。」と書いてあった。この文言は、『夜明け前』第二部において、主人公青山半蔵(明治維新前後に中山道の馬籠宿駅長)をして語らせた言葉である。交通といえば、徒歩に水運、せいぜい馬と駕籠の時代に生きた主人公の口を通して、交通の本質、この場合、

加藤 三郎

より正確に言えば、交通の意義なり社会に及ぼすインパクトを見事に言い当てている作者藤村の見識の高さに感服したのである。実際、飛行機一つとっても、アメリカの片田舎の自転車屋のライト兄弟が動力を用いて59秒ほど空に浮き260メートルほど初めて飛ばした「航空機」が、70年足らずのうちに何百人もの人を安全に運ぶジャンボジェット(B747)として世界中に就航し、国境を易々と飛び越えることになるとは、ライト兄弟も考えもしなかっただろう。自動車に至っては、もっと根こそぎ地図を変えた。

この藤村の言葉を読んでから、私は「衣食住」という生活にとって不可欠なものを示す成句に交通の「交」を追加し、「衣食住交」とした。しかし兵庫や東北の大震災のあと医療の重要性を再認識し、「衣」を『医』に変え、さらに環境文明社会を考えるようになってからは、楽しみ、娯楽の重要性にも気付き、今では「医食住交楽」を人間が生きる上で不可欠なものの代表と考えている。

